大学院生たちの日々 —研究と日常について—

2016 年度における獨協大学大学院外国語学研究科ドイツ語学専攻には、博士前期課程 5 名、博士後期課程 3 名の計 8 名が在籍しています。毎年度とも少人数ながら、いつも多彩さがあります。本特集にあたって、大学院生としての日々の過ごし方や気になっていることを全員で綴ってみました。ここに記されているようなことは、毎号の『BRÜCKE』が生成されるときの通奏低音とでも称することができるでしょう。ひょっとすると、ドイツ語学専攻の学生たちにとって、苦労の内実は将来においてなお変わっていないかも知れません。そんなときは、ここに名前のある大学院生たちのように、過去の人たちも同じく思い悩んできた道であることを励みにしてもらえればと思います。

写真 1. ドイツ語学専攻の学生共同研究室

＊ ＊ ＊　　（五十音順）

蔵書（あるいはコピー）とは少なからぬ院生たちの悩みではないだろうか。とにかく場所は取るし、すぐ増えるし、下宿だと引越しでは手間と費用によって牙をむく。手遊びに自宅の本を大雑把に数えてみたら800冊ほどあった。つらいことに、窮屈な下宿である。こんなとき、近年では電子化がその打開策としてよく話題にのぼる。それにあやかって、私もドキュメントスキャナやオーバーヘッドスキャナを奮発して、ちまちまと「自炊」に精を出してみる。そこではたと気がつく。作業にはそれなりの時間と労力を要する。こんなことに血道を上げていては本末転倒ではないか、いやむしろ学位論文との決着をつけねば本など一向に減らせないではないか、と。

博士後期課程　甲藤 史郎（かっとう しろう）

＊ ＊ ＊

院生には「ナワバリ」のようなものがあるのではないかと私は個人的に考えています。これは研究テーマなどの比喩ではなく、研究や作業をする場所のことです。

例えば、院生には共同研究室があります。ここは共同の「ナワバリ」です。ロッカー、自分だけの机、プリンター、学内アクセス……色々な便利道具がここにはあります。ここを「巣」にして研究にまい進する人は多いです。

一方で、周りの院生を見ていると「この人、共同研究室ではあまり見ないけれど、いつどこでこんなに凄い研究をしているのだろう」と思うことがあります。きっと、彼（彼女）には研究拠点たる「巣」があるのでしょう。私も、本や資料を読む時は基本的に誰にも会わないように「巣」にいました。

獨協大学近辺の草加松原には、誰にも邪魔されずゆっくり作業ができる場所が（私が見つけただけでも）いくつもあります。そんな場所の常連になって、決して高くない「いつもの」を注文し、本を片手に居座る。その後共同研究室で読んだ本の内容をまとめる。これは私の例ですが、そんな院生も少な

くないのではないでしょうか。

博士前期課程　川原 宏友（かわはら こうすけ）

＊ ＊ ＊

初めに大学院の授業は、何と言っても多彩な先生方と一対一あるいは二対一など、少人数で授業が行えることが魅力の一つです。学部生の時とは異なり先生方との距離がとても近く、ある意味贅沢で貴重な時間を過ごすことが出来ます。

また外国語学研究科ドイツ語学専攻の研究室は、フランス語学専攻の院生と共同なので意見交換や交流が出来るので、これまたある意味貴重な時間かと思います。

最後にこの一年を総括してみると、仕事をしながら研究している私にとってタイムマネジメントが大変でしたが、ライフワークに繋がるような研究テーマが見つかり満足しています。

博士前期課程　小島 大樹（こじま だいじゅ）

＊ ＊ ＊

若干の経年劣化をともなった紅梅色の扉を開けると、初夏には新緑の葉色をより青々とさせる陽射しが、晩秋には豪奢と憂いの混じる思色が部屋一面に広がっている。そんな景観の美しさとは反対に、机上に広がるのは文献や資料の写しばかりで、その地肌を隠すほど堆く積み上げられた本や紙の束は、いつもこちらを覗いている。そこが私たちの研究室だ。

先生から、そして院生から授けられた教えや手がかりを元に、無数にある箱から必要な素材の欠片を一つずつ掬い上げる日々。研究と言えるほど、一人前にはまだまだなれていない。さながら深海の奥底で酸素を求めてもがいているかのようで、常に情けない姿を周囲に晒していることだろう。けれどそこには、未だ目にしたことのないもの、触れたことのないもの、聞いたこと

のないものの数々に出会う、名状しがたい幸福もまた存在しているのである。

博士前期課程　近藤 晏奈（こんどう あんな）

写真 2. ドイツ語学専攻生たちの PC スペースと書架

＊ ＊ ＊

2016 年は、私が大学院に進学した年であると同時に、国際情勢が目に見えて大きく揺れ動いた年でもあった。少人数で行われる授業のなかで、刻々と変化する国際情勢について研究分野の異なる先生方の多様な見解が聞けたことは贅沢な経験であり、見識を広げる良い機会となった。視野を広げ、幅広い観点から物事を見ることを心掛けた修士 1 年はあっという間に過ぎ去り、研究室の机の上には、授業等で使用した資料、読みたいと思い借りた本や、なにかしらのコピーが乱雑に積み重なっている。来学期が始まるまでに、机の上を少し片付けようと思う。

博士前期課程　寺本 洋子（てらもと ようこ）

＊ ＊ ＊

美術史を研究するにあたって避けられない問題、それは文献が重いという点である。美術史はまず作品を「観る」ことから始まる。そのため作品の図版は文献にとって不可欠な要素であり、その分重くなってしまうのは仕方がない。とはいえ、少しでも楽になる方法を考えてしまい、結果として、最近ではすぐ文献の手に取れる図書館に引きこもりがちである。気づけば外との交流を断ち、一人で黙々と文献を読み漁る毎日である。広がりある視野を持つためにも外に出るべきなのだが、どうしても文献の重さがネックで、足取りも重い。足取りを軽くするために、少しでも文献を軽くする方法はないものか、目下模索中である。

博士前期課程　福島 綾太（ふくしま りょうた）

＊ ＊ ＊

大学院での研究は、自分の未熟さと向き合う毎日です。新しいものに触れるわくわく感、すぐに直面する困難、それが自分の未熟さゆえだと気付く情けなさ、そんな日々です。優秀な先輩方、同期、そして後輩たちに置いて行かれぬよう必死な毎日ですが、私を支えてくれているのも、この仲間たちです。研究室に行けば、いつも誰かがいます。研究の躓きや悩みを相談し合う、お互いの研究内容を見せ合って意見交換する、ドイツ語の勉強会をする、そのようなことを通して、一人で乗り越えられないときに背中を押してもらってきました。分野が異なる院生同士だからこそ、様々な視点からお互いを見ることができるのだと思います。院生同士、相互に刺激し合えるよう、研究に励んで参りたいと思います。

博士後期課程　根上 真依（ねがみ まい）

＊ ＊ ＊

6 年前、初の関東住まいに右も左も分からぬ中、いきなり震災に見舞われたのが昨日のことのようだが、気づけば先輩や同期だけでなく、後輩すら見送る立場となった。もともと大所帯でない上、後期課程まで上がる者も少ないのだから、しょうがないと言えばそれまでだが、自分の場合もはや“ヌシ”と言えよう。

研究室での時間が生活の大半を占め、贅沢この上ない環境に身を置かせてもらっていることは自覚しつつ、他方で社会に適合できなくなるのではという危惧もある。このままでは、いつの間にか“守り神”として祀られるか、あるいは “亡霊”と化すのがオチだ。新作能として無事成仏させてもらえるなら、それも一興だが、それまでに人類が滅亡していないとも限らない。

居心地の良さに思わず Verweile doch…と、かの台詞が口をついて出そうにもなるが、贅沢な環境に加え、先生方の熱心なご指導までいただいておきながら、そんな恩知らずな発言などしようものなら、たとえ契約していなくとも魂を持っていかれかねない。差し出すのは論文だけに留めたい。

博士後期課程　丸山 達也（まるやま たつや）

写真 3. ドイツ語学専攻生たちが疲れたときによく仮眠をとる応接セット